

論文審査の要旨

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--|----------------|-----|---------|-----|----|-----|-------|------|----|-----|-----|------|----|-----|-----|------|----|-----|-----|
| 博士の専攻分野の名称 | 博 士 （ 教育学 ） | 氏名 | 三 好 千 聖 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1・2項該当 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| <p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">中上級日本語学習者の Academic Speaking の特徴 —論証に着目して—</p> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| <p>論文審査担当者</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 20%;">主 査</td> <td style="width: 20%;">教授</td> <td style="width: 20%;">畑 佐</td> <td style="width: 20%;">由 紀 子</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教授</td> <td>白 川</td> <td>博 之</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教授</td> <td>永 田</td> <td>良 太</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教授</td> <td>仁 科</td> <td>陽 江</td> </tr> </table> | | | | 主 査 | 教授 | 畑 佐 | 由 紀 子 | 審査委員 | 教授 | 白 川 | 博 之 | 審査委員 | 教授 | 永 田 | 良 太 | 審査委員 | 教授 | 仁 科 | 陽 江 |
| 主 査 | 教授 | 畑 佐 | 由 紀 子 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 審査委員 | 教授 | 白 川 | 博 之 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 審査委員 | 教授 | 永 田 | 良 太 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 審査委員 | 教授 | 仁 科 | 陽 江 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| <p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>留学生 30 万人計画の実施等により，日本の高等教育機関の留学生が増加した。それに伴い，留学生には高度な口頭産出能力が求められるようになった。高等教育機関で指導を行うために，留学生の日本語の Academic Speaking の実態を把握することは重要なことであるが，これらに関する研究は少ないのが現状である。また，Academic Speaking の実態を詳細に明らかにするためには，Academic Speaking の評価指標を用いた評価が必要となるが，日本語を対象とした評価指標は管見の限り見当たらない。そこで本研究では，日本語の Academic Speaking の特徴を明らかにするために，以下の課題を設定した。</p> <p>課題 1：日本語の Academic Speaking について TOEFL や IELTS を基にした評価基準を作成し，複雑さ，正確さ，流暢さ（CAF）との関連性について検証する。【調査 1】</p> <p>課題 2：作成した評価基準をもとに発話評価を実施し，その分類に基づき，CAF の観点から母語話者と学習者（上位群・下位群）の Academic Speaking の特徴を明らかにする。【調査 2】</p> <p>課題 3：論理的観点から，日本語学習者上位群，下位群，日本語母語話者間で相違のあった Academic Speaking の特徴について質的に明らかにする。【調査 3】</p> <p>本論文は，全 6 章で構成されている。</p> <p>第 1 章では，本研究の背景と目的について論じた。</p> <p>第 2 章では，Academic Speaking の定義について述べ，英語や日本語の Academic Speaking に関する先行研究について概観した。さらに，発話の質の評価法について整理し，第二言語学習者の Academic Speaking の能力に関する評価基準の分析を行った。</p> <p>第 3 章（調査 1）では，日本語の Academic Speaking に関する評価指標を作成し，CAF を用いてその評価指標の妥当性について検証した。その結果，本研究で作成した Academic</p> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

Speaking の評価指標と CAF との関係については、語彙的複雑さ以外のすべての指標と有意な相関にあり、おおむね中程度の相関を示した。このことから、評価基準が効果的に機能していることを示していることが分かった。

第 4 章（調査 2）では評価指標の言語的観点の指標について、CAF の観点から Academic Speaking の特徴を量的に母語話者、学習者（上位群、下位群）ごとに分析した。その結果、CAF の各要素は習熟度によって異なる発達が見られていることが分かった。特に正確さについては、母語話者と学習者との間には上位群との間でも有意差が見られたが、学習者間には有意な差がなく、上級でも母語話者並みになるのには時間がかかることが分かった。

第 5 章（調査 3）では、Academic Speaking の論理的観点について質的に分析した。その結果、論理構造と主張と根拠を示す表現形式の使用傾向については、学習者上位群は原因と結果を示す表現形式の援用、下位群は順接、逆接を示す表現形式の多用が見られた。また、根拠内の関係性を示す表現形式については、上位群は、複文の関係性を示す表現形式を用いないため、下位群は特定の順接や逆接の接続詞を多用するために、結束性が失われていたことが分かった。

第 6 章では総合考察を行った。まず、量的分析から、正確さについては、上級においても母語話者並みになるのには時間がかかることが分かった。次に、質的分析により、論の展開構造と主張と根拠を示す表現形式の使用傾向に関しては、原因と結果の接続表現の使用や順接、逆接を示す接続表現の使用が学習者に見られた。本論文で対象とした論証は、関係性を示す表現形式を明示することが重要となり、難易度も高い。そのため、上級でも、このような結果となったと考えられる。また、根拠内の関係性を示す表現形式についても、学習者上位群は複文の関係性を示す表現形式の不使用が、学習者下位群は特定の順接や逆接の接続詞の多用が起因して、結束性が失われていた。よって、関係性を適切に示すための接続表現の指導や、正確に説明を行うことができる能力の育成が必要だと考えられる。

本論文はこれまでほとんど検討されてこなかった日本語の Academic Speaking の特徴を探る先駆的研究である。また、日本語の Academic Speaking 能力の中でも、正確さの習得が遅れる傾向があることを明らかにした点でも新しいと言える。さらに、国内の大学への進学を目指す留学生の口頭産出能力を測定する指標が存在しない現在、新たな評価指標を提案しその妥当性を検証している点でも、教育的に意義深い。今後論証以外の Academic speaking 課題を加えた指標を構築することで、口頭産出能力の大規模テストの開発を可能にする研究である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる

令和 4 年 2 月 4 日